

「夢をかたちに - 北欧の女性の歩みから見えてくること」

吉備国際大学 社会福祉学科教授

高橋 睦子

【概要】

「性別」によって、人の何が分かるというのでしょうか。先入観、偏見、差別に対する異議が世界各地で聞かれるようになってすでにかなりの年月が経っています。社会の通念やならわしも不変ではなく、教育や就労の門戸は性別を問わず開かれていることが今ではごく普通になっています。日本でも、数世代前の女性たちが直面したような露骨な性差別は、徐々に「昔話」になっているといっても過言ではないでしょう。大学でいえば、卒業式で学生の代表・「総代」も（とくに女性を推したのではないにもかかわらず）女性であることが多くなりました。

ここでは、北欧、とくにフィンランドに注目して、性別にとらわれない、誰もがそれぞれの資質を活かせるための社会がどのように造られてきたかを紹介します。北欧諸国（フィンランド、スウェーデン、デンマーク、ノルウェー、アイスランド）は、カナダやオランダなどととともに、各種の女性エンパワメント指標で世界のトップクラスを占めています。

フィンランド共和国は人口規模では約 540 万人の「小国」です。それでも、今日では、教育大国、あるいは、生活大国とも呼ばれるまでになりました。社会のさまざまな場面・立場に女性が進出・定着し、「女性初の」という表現もほとんど聞かれなくなりました。フィンランドで暮らしていると、自分や周りについて「性別」や「年齢」を改めて意識することがほとんどありません。

フィンランドの男女平等の歴史は、1906 年のヨーロッパで最初の男女普通選挙権（女性の被選挙権を含む）を起点に語られてきました。（世界初は 1893 年のニュージーランド）意外にも、フィンランドでこのような普通選挙権が成立したのは、女性参政権運動の成果ではなく、「男女平等を否定する根拠はない」という当時の内閣の判断によるものでした。

現在では、フィンランド議会（日本でいう国会）では 4 割以上が女性議員ですが、特別な女性枠を設けているではありません。政治家としてのキャリアを積む人たちの中には、男性だけでなく女性も少なくありません。2000 年から 2012 年にかけて大統領を二期務めたタリヤ・ハロネン氏もそうした女性の一人でした。では普通選挙権が導入されればあとは各自の努力次第ということなのでしょうか。この点についてはフィンランドでも見解は一致しません。もっとも、フィンランドでは見解の不一致をそれほど心配するお国柄ではありませんが。

個人の資質が十分に発揮でき、その人の夢が叶うようになるには、本人の努力も大切です。けれども、そうしたアプローチだけでは、フィンランドは現在の教育大国には到達しなかったであろうし、ハロネン大統領も出現しなかっただろうと考えられます。共働きがごく普通であると同時に、子育ての大切さについても子どもの発達という観点も含めて職場や社会の理解が得られるのならば、出産で休業はしても 1～2 年後には職場復帰するというライフス

タイトルが可能になります。

仕事と家庭の両立は古くて新しい課題ですが、人生のさまざまな局面をサポートする社会制度を工夫すれば多くの問題は克服できます。自分の夢を叶えたいのは自分だけではない、より多くの人たちのそれぞれの夢が叶う可能性を拓けるといふ、間接的な支え合いがフィンランドの人たちの「夢の叶えかた」の基本です。

人生設計に決定的な影響をおよぼす教育機会が個別の家庭の経済力に左右されないことは大切です。「持ちつ持たれつ」を基調に、学校教育（大学や専門学校も含め）の授業料をほぼ無償にしている教育政策は、多くの人々が実感できる福祉国家のサポートの一例です。言い換えれば、子どもや若い人たちに大きな社会投資をしているのです。

一方、学習権の保証は個人の夢のためだけではありません。各自が自己実現できることで全体としてさらに豊かな社会を目指す、という意味で、教育は私事（あるいは、個人にとっての利益・メリット）にとどまるものではなく、むしろ社会の原動力です。

21世紀に入って OECD（経済協力開発機構）による「PISA: 国際学習到達度調査」でフィンランドが世界トップレベルと報道されてから、日本でもフィンランドへの関心が高まったようです。フィンランドには塾や予備校もないと言え、日本では唾然とされることが多いです。フィンランドの子どもたちは、女の子も男の子も、豊かな自然を満喫しながらゆっくりとした幼年期を過ごします。義務教育は英才教育とは正反対、落ちこぼれを作らない（放課後の居残り補習はあります）、一人ひとり、主張もしますが他の人が発言する時にはしっかり聞くといった議論の基礎力、そして情報リテラシーにも長けています。彼女・彼らは、議論の基礎体力というものを時間をかけて培ってきているのですから、皆さんにとって良き・手強いライバルかもしれません。

「女性の社会進出」が話題に上ることは少なくなったフィンランド・北欧ですが、課題がすべて解決されたわけではありません。職種によっては男女比の著しい偏りがある状況（男女間の賃金格差の一因）、民間企業での管理職・COE クラスの女性比率が芳しくないことなどが指摘されています。人事面でのアファーマティブ・アクション（積極的差別）は、全く同等の実績と能力があると判断されれば（社会的マイノリティとしての）女性を優先するという取り組みですが、まだ改善の余地が残っています。

皆さんのなかには、すでに夢のイメージがかなり具体的になっている方だけでなく、まだそうでもないという方もおられるでしょう。焦る必要はありません。くじけそうになったら日記にでもつけておけば後で微笑ましい思い出になります。疲れたのなら自分の頑張りを褒めて、休息を取りましょう。すぐに得られる成果もあれば、なかなか結果のでないこともあります。お金を稼ぐことだけが「労働」ではありません。学校、職場、地域、家庭、あなたのはたらきを見ている人がどこかに必ずいます。お手本となる人に出会えばとても幸運なことです。どんな役割や立場にあっても希望と感謝を忘れないことが、「夢をかたちに」する美しい人たちの共通点です。